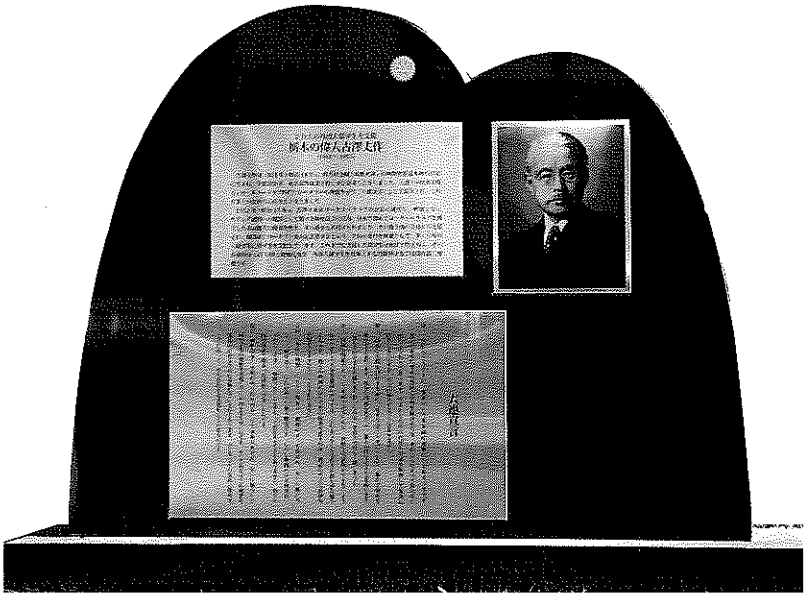
２万人の外国人留学生を支援

栃木の偉人　古澤丈作

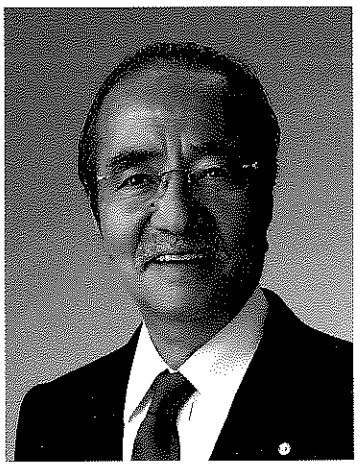


古澤丈作顕彰会

国際ロータリー第2550地区

ガバナー　川嶋　幸雄

ごあいさつ



国際ロータリー第2550地区

ガバナー **川　嶋　幸　雄**

ロータリークラブには、「米山記念奨学会」という日本で学ぶ外国人留学生に奨学金を支給する国際奨学事業があります。1952年に創設され、現在までの間、米山奨学生として採用された奨学生は、123カ国、18,506名（2015年現在）数に及び、国際奨学団体としては、事業規模・採用数とも、日本国内では民間最大のものです。

その「米山記念奨学会」は東京ロータリークラブが創設したもので、当時の会長で創設に尽力されたのが、栃木県西方町（現栃木市）出身の古澤丈作氏です。古澤丈作氏は1884年（明治14年）、県立宇都宮中学、その後東京高等商業学校を卒業、合名会社大倉会社に入社され、その後日清豆糟製造（のちの日清製油）に転属し、大連支店長として満州の大連に赴任されました。大連ロータリークラブ時代にロータリーの神髄を学び「大連宣言」として紹介され、これが今でも多くのロータリアンの心の支えとなっています。

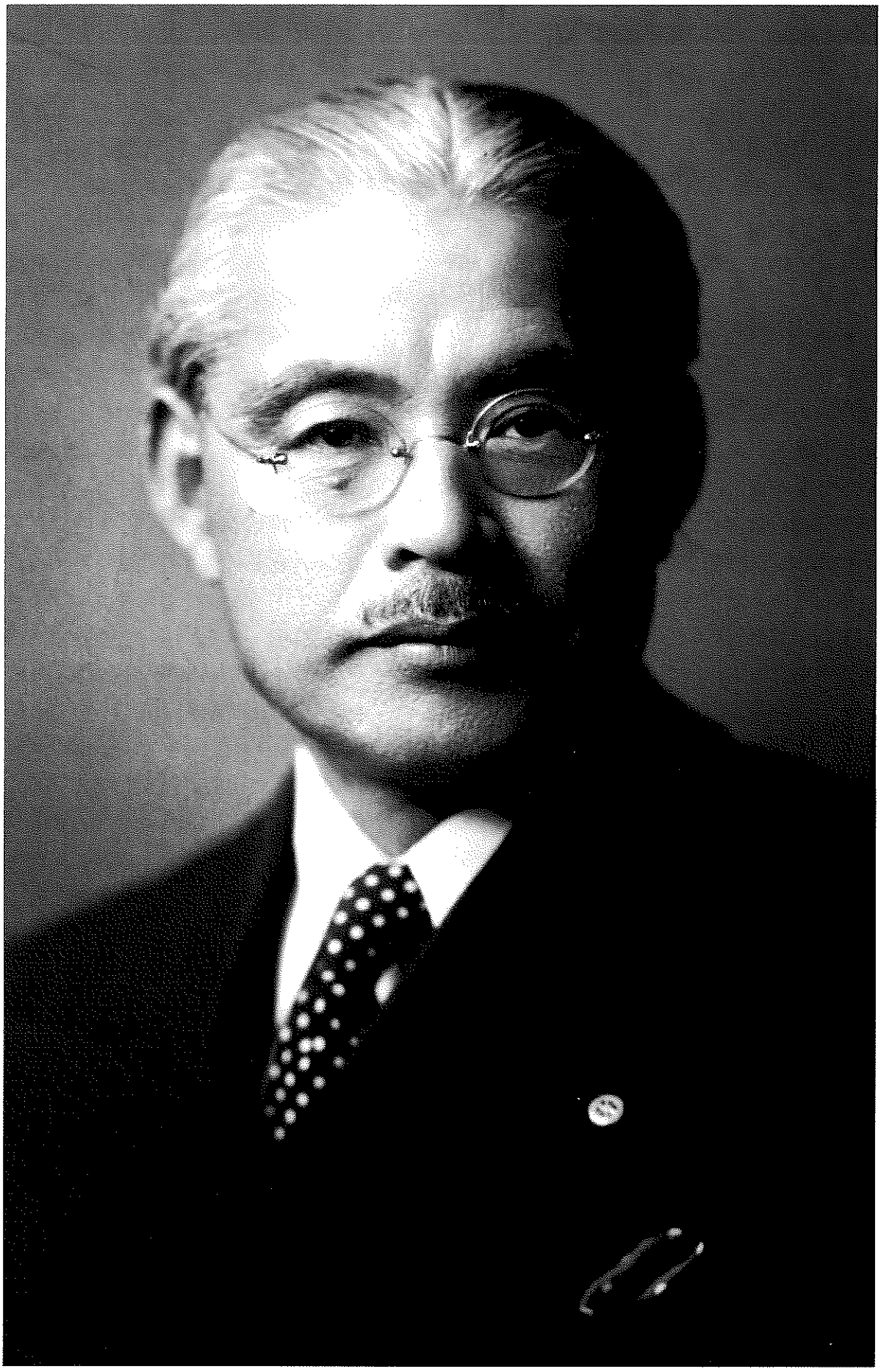
1952年、古澤丈作氏は東京ロータリークラブの会長となり、戦地となったアジア諸国の将来の助けとなるべく奨学金制度の設立に尽力されました。その奨学金制度は、日本で最初のロータリークラブを創立した米山梅吉氏の功績を讃え、「米山基金」と名付けられたのです。その後、全国のロータリー会員に支援され現在の「米山記念奨学会」となりました。

私も今まで多くの米山記念奨学生と接して来ましたが、皆さん本当にこの奨学金に感謝をされ、その分日本で一生懸命に学び、国に帰って行かれます。中には、その後、ロータリークラブに入会され、会員として活躍されている方もいらっしゃいます。古澤丈作氏の創設時の想いが今でも引き継がれている本当に素晴らしい制度だといつも感じております。

そこで、私たちは地元出身の古澤丈作氏の功績を讃えるため、「古澤丈作顕彰会」を創設し、2019年11月には栃木市駅北口公園に「古澤丈作顕彰碑」を建立致しました。そして、この度は、この「栃木の偉人　古澤丈作」を出版し、多くの方々に古澤丈作の功績を知っていただく機会となればと願っております。今後も、古澤丈作氏の功績を一人でも多くの市民の方に知っていただくべく活動していく所存です。

結びに、この冊子の出版にあたり、ご協力いただきました皆さまに心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

令和2年1月



古澤丈作略伝

栃木西ロータリークラブ
石崎 常藏

明治14年（1881）4月8日、栃木県上都賀郡金崎村（明治22年（1889）金崎、金井、本城、元、本郷5ヶ村が合併し西方村となり平成23年10月1日栃木市に編入合併）に父 古澤貞治郎、母 せいの長男として生まれた。

金崎村は、例幣使街道金崎宿として発展した。古澤家は代々、金崎宿の本陣をつとめていた（参考：本陣とは、大名宿ともいう。街道の宿場に置かれた大名、公家、幕府役人など貴人の宿泊旅館、建物は書院造で門、玄関、上役の間がある広大な規模であった）。父貞治郎は、元村の鮎田分家、新平（晋平）の次男として生まれ、のち古澤家の養子となり、家業の農業に精励のち西方村会議員をつとめた。貞治郎の兄 祐次郎は、戸長をつとめ自由民権の運動家として知られ、栃木県会議員さらに西方村村長を第二代第五代と２度つとめ地域発展に貢献したほか西方興業銀行の役員をつとめた西方村を代表する人物であった。なお、丈作の兄弟姉妹は、長女たつ、次男平作、次女とし子、三男仁三郎、三女きわ子の三男三女であった。

丈作は、同33年（1900）3月、県立宇都宮中学校を卒業し、東京高等商業学校に入学し、同36年（1903）には、教科実習として栃木町から太平山を経て富山村西山田の大中寺を詣で同村富田より佐野町の正田家（鋳物商、佐野銀行頭取をつとめた）さらに足利町の原田家（糸商、足利銀行設立発起人）等当時の豪商達に、学友6人で化粧品訪問販売を行い、北関東の地方経済のリポートとして「行商日誌」を残した。同38年（1905）3月、東京高等商業学校卒業と同時に大倉喜八郎との縁で合名会社大倉会社（以下、大倉組）に入社、同年古澤家の家督相続をした。のち、金崎の古澤家は、妹きわ子に同村の中新井彦重の三男の利を婿にむかえ継承した。利は石橋高校長、宇都宮高校副校長を務めた。丈作は、大倉本社と呉支店につとめた後、同41年（1908）3月に大倉組大連支店創設の重任を託され、その設立後主任となり、同43年（1910）ロンドン支店駐在員をつとめた後、大正元年（1912）日清豆糟（まめかす）製造㈱に転属となり、引き続きロンドン駐在員となった。日清豆糟製造㈱は、大倉組創始者の大倉喜八郎が日露戦争後、満蒙の豊富な農産資源に着目し、新事業の開発を企画、一方横浜の肥料商松下久治郎は満州の大豆油糟に注目していた。2人が共同して明治40年（1907）3月7日東京に資本金300万円で創立、初代社長は大倉組高島小金治が就任、大倉喜八郎は顧問となった。同年12月に大連工場を完成操業開始した。丈作は大正2年（1913）帰国、同3年（1914）5月23日東京士族、海軍造兵総監（後の海軍技術中将）で澤太郎左衛門の長男で日本赤十字社理事をつとめた澤鑑乃丞（別記1）の三女 満江（明治27年10月生）と結婚、同年7月28日大倉組より日清豆糟製造株式会社取締役に就任、大連支店長として新婦と共に赴任、同年10月15日高島初代社長辞任し、松下九治郎が二代目社長に就任

した。大連は広大な大陸の一端にあり、名実ともに夢の大陸であった。そこに内地から新天地を求めてくる者が相次ぎ、大正初期には人口が7万人を超え、市民の市制への願いがあり、大正4年（1915）4月大連が市制施行となり、丈作は官選市会議員に就任、３期つとめた。さらに大連商業会議所副会頭をつとめた。のち、詳細は不明であるが会頭をつとめた。（昭和17年（1942）発行の「在京浜栃木県人事業展望」による）同7年（1918）5月に日清豆糟製造の商号を日清製油株式会社に改め同年松下商店を合併した。そして翌年に関連会社として、満州ペイント㈱、満州石鹸㈱、朝鮮肥料㈱が発足し、丈作が各社の社長を兼務した。同9年（1920）6月に取締役より専務取締役に就任した。同11年（1922）大連市議会議員を退任し、その後欧米巡遊に出かけた。その成果として『欧米市場に於ける我満州特産』（満州重要物産同業組合）という講演記録を残した。妻満江の日記によるとこの頃丈作はロンドン帰りで上から下までピシッときめたジェントルマン。英語は完璧、しかし日本語をしゃべると栃木弁で、妻と娘達はほほえましく感じていたようだった。同12年（1923）9月1日関東大震災が起きたとき、丈作は東京へ出張中であった。留守宅の家族は大変心配したが、無事が確認できたのは9日になってからであった。同13年（1924）10月日清製油㈱大倉喜八郎顧問辞任。同14年（1925）6月6日二代目社長松下久治郎が58歳で急逝し、翌年8月大倉組副頭取門野重九郎が三代目社長に就任するまで古澤専務が社長業を代行した。昭和2年（1927）3月の昭和金融恐慌の影響で、日清製油の7月期決算は創業以来の大赤字となった。このため三井信託会社（この時社長は米山梅吉であった）より120万円借入し、大倉組からの借入金80万円を肩代わりして実質40万円の借入れをもって再出発となった。同年9月丈作は専務を辞して、取締役に降格となった。この年丈作は、2度目の欧米巡遊を行った。同4年（1929）の役員会記録によると、万一の時は役員の私財提供まで申し合わせしている。再建の柱は、徹底した経費削減と植物油加工業に徹することであった。経費削減は本社よりも大連支社の方が過酷だったという。

専務を退いた丈作は、同3年（1928）12月、会員23名で満州国初の大連ロータリークラブの創立に参加し初代副会長（会長は満鉄副総裁 松岡洋佑、のち総裁、外務大臣を務めた）となったほか、大連取引所信託会社監査役、大連取引所銭鈔信託会社取締役、満州清酒㈱取締役、大連油房連合会会長など大連の各種団体の役員として活躍した。そして、古澤はサラリーマン重役なので辞令でいつ転任するかわからない立場なので、ロータリーの真髄を強い意志を持って学び、同4年（1929）の70地区第1回地区大会で別記の通り「大連宣言」（別記2）を発表した。翌年この宣言は、日本ロータリーの創設者である米山梅吉に激賞された。また同5年（1930）ベルリンでの世界動力会議では、満州代表をつとめ同9年（1934）大連駐在ベルギー名誉領事をつとめ、シヴアリエロルドルドクーロンヌ叙勲を受けた。この年日清製油の社業が回復し、同年7月に復配をはたした。同10年（1935）頃には、日本国内での活動が中心となり、住居も目黒区上目黒に住んだ。さらに東洋モスリンの専務に就任し、またその系統の埼玉繊維㈱社長を兼任した。また、同11年（1936）5月東京ロータリークラブに入会した。この年の神戸における地区大会で、大会宣言として「大連宣言」

が採択された。国粋主義の傾向が強くなっていく中で、この宣言は日本のロータリアンのバックボーンとなった。一方、日清製油では、同年9月14日松下外次郎が四代目社長に就任。なお、同13年（1938）に東洋モスリンは東洋紡織工業に商号変更となり、同16年（1941）東洋紡織工業㈱が鐘紡に合併となり鐘淵紡織㈱監査役に就任した。大東亜戦争終盤に目黒より大森へ居を移した。同20年（1945）11月30日終戦直後の株主総会で日清製油㈱取締役を退任した。翌年開店休業状態の日清製油㈱の経営者に古澤たちが相談の上、12月12日四代目社長松下外次郎に代わり元常務である福田清三郎を五代目社長に担ぎ出した。一方、同21年（1946）4月28日米山梅吉が死去した。丈作は同22年（1947）東京ロータリークラブにリチャーターメンバーとして参加。同25年（1950）6月東京ロータリークラブ月報に、古澤が「日本ロータリアンに与えられた課題」を発表した。この頃は日本は敗戦から立ち上がり始めた混乱の中で、商道徳は乱れ、経済活動は今では考えられないほどの問題だらけで、日本の復興再建は困難と考えられていた。このような時期に「職業倫理の貴さ」を訴えた。まさにこの考えこそ、職業奉仕の真髄そのものであった。同27年（1952）第33代会長となった。就任早々、会員はその誕生日の週間の例会に夫人を同伴しようとフェミニストぶりを発揮しての提案で、会員をびっくりさせたり、また同28年3月15日の例会では、例会時間の15分延長を即決する離れ業を演じた。前者は実行されず、後者も永続しなかった。戦地となったアジア諸国への贖罪として、同年12月米山基金の初代委員長となり、古澤試案（アジア地域の医学、農学、化学、工学系の日本留学生を対象とした奨学制度）が示された。これに従いタイからソム・チャード・ラタナチャタ君とインドのイーベン君、ロイ君への援助となった。この東京RCの事業が多地区の事業となり、ロータリー米山記念奨学会へと発展した。また、丈作は、彼ら留学生を自宅に度々招待したと伝わっている。日清製油は、同28年（1953）五代目福田社長急逝に伴い開かれた取締役会において、坂口幸雄が六代目社長として就任し、丈作は相談役として再び日清製油に席を得た。翌年秋に肺がんのため聖路加病院に入院、手術を行い退院する。しかし、同30年（1955）7月19日に容態が悪化し、同病院で逝去した。享年75歳であった。多摩霊園の古澤家墓地に埋葬された。戒名、泰雲院丈山吉祥居士。なお、日清製油はその後も発展を続け、現在の「日清オイリオグループ」となっている。

古澤家は、長女貞子が、収三（日本無機化学工業㈱社長）を婿に迎えて継承した。また、次女に淑子（声楽家（ソプラノ）姓倉知）、三女順子（姓宮子）に恵まれた。

令和元年11月9日栃木駅北口公園に古澤丈作顕彰会により古澤丈作記念碑設置除幕式が盛大に行われた。

【別記1】

澤 鑑之丞

幕末期の幕臣で静岡県出身の明治期の海軍教官澤太郎左衛門の長男として万延元年（1860）1月20日東京に生まれた。明治14年（1881）7月海軍兵学寮を卒業し、同18年（1885）海軍省機関士に任じ、その後造兵官となった。同23年（1890）からの2年間造兵監督官としてイギリスに駐在、同35年（1902）帰国、同年5月東京造兵廠長、次いで海軍造兵廠長となり、同39年（1906）海軍造兵総監（後の海軍技術中将）になった。大正2年（1913）予備役編入後日本赤十字社理事、水難救済会幹事として活躍した。著書に「海軍70年史談」（昭和17年（1942）刊）

昭和22年（1947）5月21日没　享年87歳

【別記2】

「大連クラブのロータリー宣言」（現代文に意訳）

第一、当然のことですが、事業の人である前に道徳の人であるべきです。考えてみるに事業の経営に全力を傾けるのは、そのことによって世の中の役に立つためであります。ですから我々は人の道を無視して事業に成功しようとする人たちに味方をすることはありません。

第二、成功か失敗かを口にする前に、成すべきことを尽して、進んで奉仕を果たそうと思います。自分の利益に先立って、他人の役に立つことを願います。「最も奉仕するもの最も多く報いられる」を我々は信じて疑いません。

第三、特別な関係でチャンスを独り占めしたり、世間では納得ができないようなことをして大金を獲得したりする。このようなことは我々が最も忌み嫌うものです。我々の精神に反してその信条をみだすのは、利益のために信用を失墜するよりひどいことはありません。

第四、「奉仕の理想」のもとに集まり、親睦によって結ばれ、互いに磨かれ、互いに助け合う、これが我々の集う趣旨です。しかし仲間だけを特別扱いすることはなく、仲間でないことをもって拒否することもありません。我々が利害関係で集まった団体ではないからです。

第五、無駄な争いは世の中でおこなわれるべきではありません。互いに協力して博愛平等の理想を実現していかねばならないのです。そして我々はこの理想を世界に広めるために活動しているのであります。ロータリーの気高い使命はここにあって、その存在する意義もここにあるのです。

古澤家　家系図

- 栃木県上都賀郡本陣代々・地主を務める 古澤貞治郎（没）
  - 妻　せい（没）
  - 長女　大月たつ（没）
  - 長男　丈作（没）
    - 妻　満江（没）
      - 長女　古澤貞子
        - 夫　元・日本無機化学工業ＫＫ社長　古澤収三（没）
          - 長男　裕治　クラリネット奏者　桐朋学園ソルフェージュスクール　自由学園男子部教師
            - 妻　恭子
          - 長女　睦子
      - 次女　倉知淑子
        - 夫　倉知緑郎
      - 三女　宮古順子
        - 夫　宮古忠啓
  - 次男　平作（没）　元・貿易会社勤務
    - 妻　みい（没）
  - 次女　本多とし子（没）
    - 夫　高野山僧侶・教員　本多辰乗（没）
  - 三男　仁三郎（没）　元・満州石鹸ＫＫ勤務
    - 妻　しげ（没）
  - 三女　きわ子（没）
    - 夫　利
      - 長女　せい子
      - 長男　功
      - 次女　和子
      - 三女　道子

澤家　家系図

- 澤 太郎左衛門（没）　開陽丸副将・海軍兵学校副総理（一八三五～一八九八）
  - 妻　てう（没）
  - 長男　鑑之丞（没）　海軍造兵総監・日赤理事（一八六〇～一九四七）
    - 妻　栄子（ヨシコ）（没）
    - 長女　みや（没）
    - 長男　鏗治（没）　元・三井物産勤務
      - 妻　みさお（没）
    - 次女　鈴木多鶴（没）
      - 夫　鈴木乙免（没）　海軍大佐
    - 三女　古澤満江（一九七四没）
      - 夫　古澤丈作（一九五五没）
        - 長女　古澤貞子
          - 夫　古澤収三（没）　元・日本無機化学工業KK社長
        - 次女　倉知淑子（古澤淑子）
          - 夫　倉知緑郎　作曲家　ジュネーブ・日瑞協会セクレタリー
        - 三女　宮古順子
          - 夫　宮古忠啓　元・富士銀行取締役　元・日野自動車監査役
    - 四女　野原　鋭
      - 夫　野原大輔（没）　元・正金銀行取締役
    - 次男　鋏男（ヒデオ）（没）　元・個人タクシー協同組合長
      - 妻　ときわ（没）
    - 五女　青木輝子（没）
      - 夫　青木　保（没）　元・出光興産勤務
    - 三男　義道（没）　元・海軍医中佐
      - 妻　松野

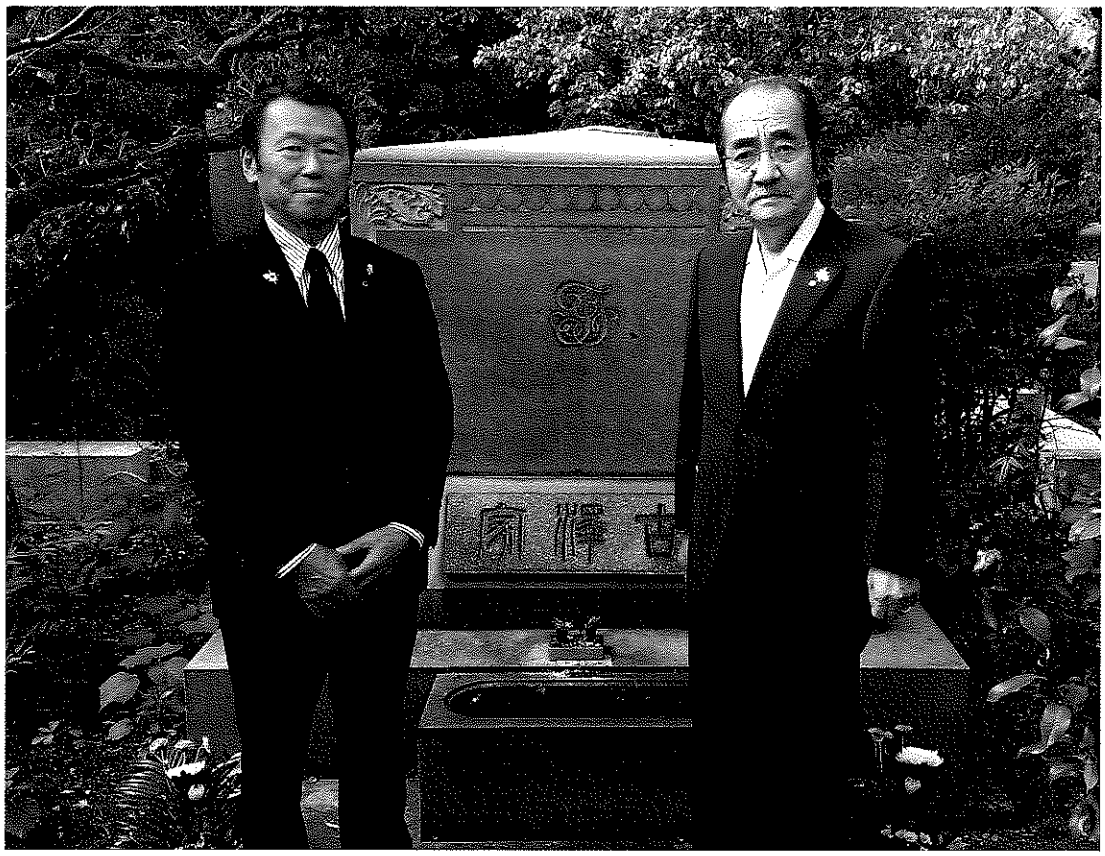
貞治郎　せい　満江　丈作　鑑之丞

満江の姉妹達と

還暦の頃

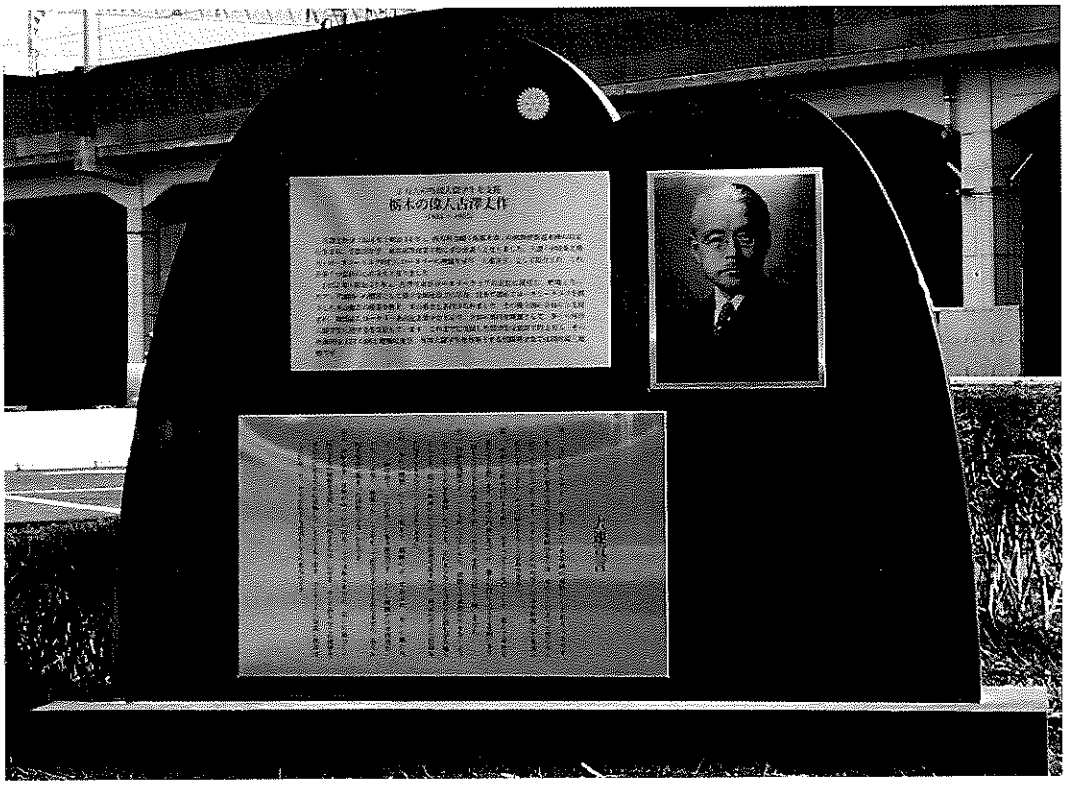
一九三八年、淑子の渡欧を記念して。

左から
父・丈作、淑子、妹・順子、母・満江、姉・貞子



古澤家墓所（多摩霊園）

左：寺内地区幹事　右：川嶋ガバナー



古澤丈作顕彰碑

顕彰碑除幕式（令和元年11月9日）

下野新聞の記事より

県南・両毛版

郷土誇り偉人一冊に

栃木の石崎さん

681人略歴「栃木人」発行

市民の共通理解深化狙う

【栃木】平柳町2丁目の郷土史研究家石崎常蔵さん（75）は1日、明治～昭和に活躍した市ゆかりの人物681人の略歴集「栃木人～明治・大正・昭和に活躍した人びとたち」1千部を発行した。平成の大合併で誕生した1市5町による新市の市民に、共通のふるさとの人物として理解してもらうことが狙い。政治、経済、文化など幅広い分野を網羅する一冊となっている。（江戸美佐子）

石崎さんは銀行員を経て50歳で不動産業を始めた。一方、市内の歴史に興味を持ち15年ほど前から資料を収集し、2010年に不動産業の経営を息子2人に譲って、本格的な調査や執筆に取り組んでいる。

今回の発行は、14年に著書「栃木町の金融変遷史」を発行した際、金融以外のことについても関連で幅広く調査したことが基になっている。今年、市制80年の節目を迎えたことを記念し、市制施行の4月1日を発行日にした。

略歴集はB5判、522ページ。顔写真や資料画像も盛り込みながら、今日の市の基盤を作った人たちを50音順にまとめた。石崎さんの調査で市出身者であることが知られるようになったロータリー米山記念奨学会提唱者の古澤丈作や、石崎さんが理事長を務める更生保護法人栃木明徳会の設立に尽力した慈善活動家の平岩幸吉なども盛り込んでいる。

石崎さんは「市民の多くの人に読んでもらいたい。今回、記載できなかった人物も多数いるので、続編の発行もできればいい」と話している。

税込み5400円。サンランド栃木で取り扱う。問サンランド栃木0282・24・3331。

著書「栃木人」を発行した石崎常蔵さん

平成29年4月4日掲載

下野新聞の記事より

1729.8.19

雷鳴抄

2017.8.19

ロータリー米山記念奨学会は、日本滞在の私費外国人留学生793人に、毎月10万～14万円の奨学金を支給している。全国のロータリークラブ(RC)会員からの寄付金が財源である▼支援した留学生はアジアを中心に累計で約2万人。出身地は125カ国に及び、留学生対象では民間最大規模とされる。日本ロータリーの創設者、米山梅吉さんの功績を記念したもので、発案したのは西方村(現栃木市)出身の古沢丈作さんだ▼1881年生まれで旧制宇都宮中、東京高等商業学校(現一橋大)を卒業し実業界に入った。中国東北部を拠点に活動し、日清製油役員などを務め、戦後、東京RC会長時代に「留学生を受け入れ信頼関係を築くべきだ」と奨学事業を始めた▼その後、日本の全RCの共同事業に発展。財団化されて今年で50周年を迎えた。くしくも県経済同友会の前筆頭代表理事、板橋敏雄さんは奨学会理事長を7年間務めた。奨学会と本県の関わりは深い▼県内では現在、宇都宮大などで学ぶ中国をはじめ9カ国からの留学生22人に支給。奨学生1人に対し、一つのRCが世話クラブとなり、日常生活などの相談にも応じる。経済面だけでなく心の通った支援を行っている▼奨学生の多くは母国で活躍している。古沢さんのまいた種はアジア各国と日本との懸け橋になっている。

平成29年8月19日掲載

下野新聞の記事より

米山記念奨学会の創設者
故古澤さんの業績学ぶ

鹿沼東RCが講演
鹿沼ロータリークラブ

【鹿沼】鹿沼東ロータリークラブ（RC）の例会が10日、栃木市西方町金崎の料理店で開かれた。ロータリー米山記念奨学会の創設者・故古澤丈作さんの業績を学ぶため、生家のある西方町を会場とした。

古澤さん（1881～1955年）は東京高等商業学校（現一橋大）を卒業後、実業界に入り中国北東部を拠点に活動。戦後、東京RC会長時代に日本ロータリーの創設者米山梅吉さんの功績を記念してアジアを中心に外国人留学生のための奨学会を作った。

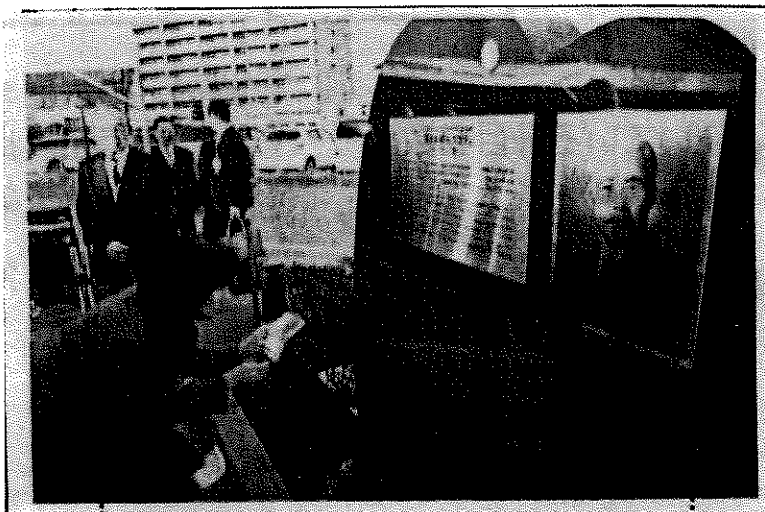
古澤さんのめいの古澤せいさん（93）が「伯父 古澤丈作の想い出」と題して講演した。せいさんは丈作さんを鮮明に覚えており、「とてもおしゃれでモダン。紅茶とトーストを好んでいた。入院した際に東洋人のお見舞いが多く、当時不思議だった」と振り返った。家族写真なども披露した。

例会には2550地区の伊東永峯ガバナーをはじめ、近隣のクラブからも参加があり約40人が貴重な話に耳を傾けた。一行は近くの生家を訪問、せいさんから思い出話などを聞いた。（枝村敏夫）

伯父の思い出話などをする古澤せいさん

平成30年10月12日掲載

下野新聞の記事より



除幕後の記念碑を見学する関係者

栃木で国際RC

奨学金制度設立に尽力

古澤丈作の記念碑除幕

【栃木】外国人留学生のために奨学金制度設立を提唱した旧西方町出身の古澤丈作（1881～1955年）を顕彰する記念碑がこのほど、境町のえきまえ公園に建立され、除幕式が行われた。

県内をエリアとする国際ロータリー第2550地区が建立した。東京ロータリークラブ会長だった古澤は太平洋戦争後、戦地となったアジア諸国への贖罪として奨学金制度設立に尽力した。現在は米山記念奨学会となり、アジアを中心に累計で約2万人の留学生を支援している。

除幕式には、同地区の川嶋幸雄ガバナーや大川秀子市長らが出席。古澤について、川嶋ガバナーは「世界の平和のためにアジアの人々の教育資金をつくった。郷土の偉人だ」と紹介した。（沼尾歩）

令和元年11月23日掲載

「 栃木の偉人　古 澤 丈作 」
令和2年2月1日発行

編著者　石 崎 常 藏
国際ロータリー第2550地区
元ガバナー補佐
古澤丈作顕彰会　顧問

Rotary